堕ちていく白百合

K

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19325091

R-18, 守エク霊, エク霊, 18禁, モ腐サイコ100, ♡喘ぎ, 霊幻受け

EntsCat様（user/11852202）とリレーエロ小説作りました！
やっほーい！！
今後も続きますので、ぜひ読んでいってくださいね！
エンツさんの所でもお読みいただけます！

そしてひよたまさん（user/39563383）からめっちゃ素敵なファンアートいただきましたぁぁ！（掲載許可済）
ありがとおおお！！

【堕ちていく白百合】とらのあなで通販中です！
文庫本/416P/R18
pixiv掲載本編＋溶けない愛蜜糖＋書下ろし３編収録
ご興味のある方は下記URLよりどうぞ！
https://ec.toranoana.jp/joshi_r/ec/item/040031175393

各種捏造設定含みます。
設定＞良家に嫁いだ元・霊とか相談所所長のあらたたさんが夫を突然死で亡くして未亡人に！
悲しみに暮れ一人で自分を慰めたりして旦那に操を立てていた！
だがそんなある日、義弟のエクボに部屋に呼ばれて・・・？！

和装×生肌×仏壇×背徳感×大和撫子×兄嫁NTRの特盛大サービスのエロでございます。

登場人物
霊幻新隆 > 良家の奥様。28歳。最愛の旦那を突然死で亡くし未亡人に。和装女装美人。良家の奥様らしく言葉遣いはお上品に。
九下部笑窪（エクボ）> 誠司の弟。35歳。道楽息子で兄と比較されて誠司に嫉妬している。霊幻を手籠にする係（えっ）
九下部誠司（モブキャラ）> 霊幻の最愛の旦那様。逝去済み。思い出程度に出てきます。

以下内容がふんだんに織り込まれておりますので、閲覧の際はご注意ください。
霊幻がめっちゃ奥様
霊幻が美人（美丈夫か）
霊幻が常に和装女装で浴衣も女物着ています
エクボがちと横暴よね（それがそそるよ）
エクボがNTRぶちかますぜ
喘ぎがかわゆすかわゆす

上記ご参照の上、お読みくださりますと幸いです。
感想などいただけますともれなく椅子から転げ落ちるほど喜びます。
その際はぜひマシュマロご活用ください。
この度はご覧いただき、誠にありがとうございます。

Table of Contents

- 堕ちていく白百合

堕ちていく白百合

※※※EntsCatパート※※※

目の前が真っ暗になった。
新隆は夫を愛していた。愛されて、愛されすぎて骨抜きにされるほどに、名家の跡取りの夫との生活を愛していた。
義父母も厳しくもおっとりとした優しい方達で、『金持ち喧嘩せず』、を地で行く、裕福な生活が心の余裕を醸し出している、温かく新隆と夫の２人を見守ってくれている人達だった。
だから、コンビニに飛び込んだ車に轢かれて夫が帰らぬ人になった、と聞いた瞬間に、新隆の膝は力が入らなくなってしまった。
「誠司さん……誠司さん……」
しくしくと泣きながら顔を覆って夫の名前を呼ぶだけになった新隆を優しく叱咤したのは、同じく嫁いだ身である義母であった。
「しっかりしなさい、新隆さん！喪主を務めるのはあなたです。誠司の妻として、最後の大仕事ですよ」
きり、と身を引き絞られる思いであった。
新隆は九下部家の藤の家紋の入った喪服を義母から借り受け、きりりと黒い帯を締め、立派に喪主としての務めを、通夜から葬式の間勤めあげた。
「……ふうん、突けば崩れそうな危うさだな」
「笑窪。現跡取り代理になんて言い草ですか」
日本酒を注ぎながら、義母が笑窪──新隆の義弟に苦言を呈す。
「そもそも跡取りの妻が男ってのが無茶があったんだ。どうするんだよ、九下部家は」
「それは……お前がいるでしょう、笑窪。お前の子に継がせれば良い話です」
「俺のガキ、ね」
くいっとお猪口をあおって、笑窪は皮肉な笑みを浮かべる。
「俺も男を娶ったらどうするつもりなんだよ、母さん」
慌てた動きを一瞬取った新隆の義母だが、そこは名家の当主夫人、

袖を打ち払って毅然と言い放つ。
「お前の精子を使って金で女に跡継ぎを産ませるまでです。雑作もない」
「ふぅん」
つまらなそうにうなった笑窪の目線の先には、必死にセクハラをかわしながら、親戚の叔父叔母達にお酌をしている新隆の姿があった。

天皇家と遠縁となる九下部の屋敷には２つの蔵と、大きな日本庭園があり、裏口は２つもあるので、戸締りの確認はちょっとした散歩になっていた。
「やっと終わりましたよ、誠司さん」
簡易的な仏壇は夫婦の寝室に入れて貰えた。
優しそうに笑う夫の写真の前に、新隆は報告しながら好物のラミーを供える。
お酒のダメな新隆と違って、酒の好きな人だった。
「逢いたい……話したいよ、誠司さん」
嫁いでから２年、いつでも新隆のそばにあった、優しい声、温かな体温。
優しい義父母が「貴方はもう九下部家の嫁です。これからの身の振り方はゆっくり考えればよろしいが、慌てて出て行ったりしないでおくれ。私たちにとっても３人目の息子のようなものなのだから」と言ってくれても、埋められない寂しさが新隆を襲う。
「モブに久しぶりに連絡を……いや、ダメだ、夫が死んですぐ他の男にすがるなんて……」
元々呪術クラッシュの常連客だった九下部 誠司に熱烈なアタックを受けて、相談所を畳んで名家に嫁いだのは新隆自身だ。その時に投げ打ってしまったものに縋るのは、不誠実だと感じた。
「……寂しい」
２人用の寝室が広く感じて仕方ない。
「誠司さん、お願い、慰めて……」
するすると女性用の喪服の裾を広げて、襦袢もはだけて性器に触れる。そう言えばそろそろ、夫婦の営みを持つはずの日だった。

「ぁ、あっ……ぅあっ……誠司さん、誠司さん……」
仏壇の前でちゅこちゅこと陰茎を淫らにこする姿を見せつける。生き返って襲ってこい、と言わんばかりに。
「足りない……お願い、誠司さんで埋めてぇっ……」
つうっ、と涙を流しながら、新隆は押入れに隠した物入れから小ぶりの張り方を取り出す。
黒檀でできたグロテスクな形のソレは、九下部家に嫁いでくる令嬢が初夜に苦しまないように、と代々受け継がれてきた拡張用のものだった。
「んぁっ……」
当然カウパーを絡めて埋め込んでも、足りない。
「せいじさぁんっ……」
結局新隆は遺影の前で激しく張り方を挿送して、蜜色の髪を振り乱しながらも、陰茎への物足りない刺激で少しばかりの白濁を漏らすだけだった。
でも、それでも。
「ぜいじざん……」
ぐしゃぐしゃに泣く新隆には、一時の慰めにはなった。

※

「……」
ごくり、とその姿を、生唾を飲み込みながらも襖の隙間から見つめる目があった。
が。
「……今じゃねぇ」
ずきずきと痛みを訴える股間を無視して、立ち去る。
嵐が、新隆を中心に、起ころうとしていた。

※

新隆の夫が帰らぬ人となって、１年が経った。
妙な色気のある新隆には九下部家の分家の色男から食事への誘いが

あったり、名家の令嬢からの見合いの申し込みがあったりしたが、全て断っていた。
まだ若いのだから、と積極的に２度目の春を迎えることを義父母は勧めてくれていたが、新隆は亡き夫の誠司に操を立てる心を、この１年で固めていた。
「白い喪服を仕立てとうございます」
贅沢を言わない嫁が初めて口にした高級品の中身に、義父母は絶句する。
白い喪服。それはもう「誰とも結婚しない」という誓いの証し。
まだ２８才の新隆に、それは駄目だ、早まってはいけない、と義父母は必死に説得した。
結局新隆は白い喪服は諦めたが、これまでは話ぐらいはしていた求婚者と会いもしなくなった。義父母が心配するほどに、亡き夫に新隆は心を寄せていた。
──その健気な様子が、余計に人を惹きつけるとも知らずに。

※

新隆の夫の一周忌。法事に集まった九下部家の分家の叔父叔母の主な酒のつまみは、本家の男嫁の新隆のことだった。
やはり義母から借りた九下部家の喪服をキリリと着こなして給仕をする新隆に下世話な酔っ払いの視線が絡みつく。
男でありながら腰が細く、色の白い新隆は、女性物の和服を着こなすと妙に色っぽい。
「こっちにきて酌をしておくれよ、ほら」
酔客の１人がぐいと新隆の手を引く。
「あ、そんな急かさなくても、お相手いたしますから」
元々が接客業の新隆は叔父をあしらってやんわり手を離して貰おうとするが、逆に更に手を引いて膝に抱き込まれてしまう。
「お相手も何も、胸があるわけでもないのに、ただ話してもらってもなぁ」
叔父が新隆の脇の身八つ口から手を差し込んで胸をさする。
「あっ」

突然のことに身構えられなかった新隆が目を見開いて甲高い声を出す。
「お、おい、変な声出すんじゃねぇよ」
「……っ、すみませ」
「加賀路叔父さん！？無体もいい加減になさりませ！叔母さんに言いつけますよ！？」
ずいっと身体を割ってきた義母に助けられて、新隆は叔父から解放される。
「それだけは勘弁してくれ〜」
おどける叔父に親戚たちが上品にくすくすと笑う。
それを背後に聞きながら、新隆は使い終わった食器を持って土間の台所に向かっていた。
「ありがとうございます、奥様」
「いえ……」
お手伝いさんと仕出し屋に返すために２人で食器を軽く洗って片していく。
「……ふう……」
蝉時雨の陽気。
主な部屋はクーラーが入っているが、大きな昔から建っている九下部の屋敷は、自然の風だけで涼を取っている場所も多い。
土間になっている台所もそうだった。
「あつ……」
いつもならこんなはしたないことはしないが、ここは裏方でお手伝いさんしかいない台所である。
新隆は少し襟元を緩めて、垂れてきていた汗を白いガーゼのハンカチで、広げた胸元に手を差し込んで拭った。
「……へえ」
それをビール瓶片手に眺めている目があった。
「色っぽいマネするじゃねぇか」
「！！」
その声に白い胸元を慌てて合わせをかき寄せて隠す。
「エクボさん……何の御用ですか」
九下部 笑窪。新隆の夫の弟で、新隆の義弟にあたる。現在の九下部

家の本家の跡取りだ。新隆はこの義弟が少し苦手だった。
夫に似ているエクボは、少なからず新隆の心を揺さぶるから。
「いやぁ何、つまみが切れてね」
「……今お持ちしますので、大広間でお待ちください」
くるりと踵を返して支度を始めた新隆を、エクボはビール瓶を傾けながら黙って眺めている。
「……」
白いうなじに濡羽色の喪服が映えている。
そのうなじを。
汗が一筋、つうっと伝うのを見て。
ごくんとエクボはビールを飲み下した。

※

法事も終わり、新隆はお風呂をいただいて疲れを浮かせて、布団に潜り込もうとしていた。
「新隆さん、ごめんなさい。泊まってる笑窪がね、晩酌に付き合って欲しい、って言ってるのだけれど……」
「……分かりました。着替えますので」
跡取りの誘いを居候の嫁が断るわけにはいかない。新隆は箪笥に手をかけた。
「あら、男同士なんだし、そのままで大丈夫でしょう」
「……はあ」
新隆は夫が生前仕立てた、裾に蒲公英の刺繍のある濃紺の浴衣を着ていた。
（少しだらしないけれど、あの人なら大丈夫か）
そもそもエクボは次男坊なのをいいことにこれまでフラフラしていた道楽息子である。多少の無礼は気にしないだろう、と新隆は判断した。
「じゃあ、あの子の部屋によろしくね」
「はい、お義母さま」
新隆は法事で疲れた足に鞭打ってエクボの部屋に向かう。
「新隆です」

襖の前で名乗る。
「おお、いらっしゃい」
その返答に襖を開けて新隆はギョッとする。
当然かもしれないが、エクボの部屋にはすでにお手伝いさんによって布団が引かれていて、新隆はそんな部屋に入っていくことになるのだった。
（まさか。でも。男同士で、そうそうそんな事にはならないはず……）
新隆は無意識に帯を絞めつつ、膳を前にしたエクボの隣に裾を払って座る。
「いい浴衣だな。兄貴が仕立てたものか？」
「え、ええ……」
「アンタの髪色に良く合ってる。兄貴は着道楽だったから、着物をよく贈られて困ったんじゃねぇか？」
「そうなんですよ、もう箪笥に入らない、というのに、似合うから、と呉服屋を呼んで……」
故人の思い出話で盛り上がって、新隆はすっかり油断していた。
「なあ、１人で呑んでもつまんねぇよ。アンタも付き合ってくれねぇか？」
「俺は、お酒は……」
「これはいい酒なんだぜ？味見だけでも、ほら」
「じゃあ……」
ちろ、と桃色の舌でお猪口のフチを少しだけ舐める。
たったそれだけで、新隆は足に力が入らなくなってしまった。
やめておけば良かった、と後悔し始めた時に。
「……そういやこれもアニキが言ってたんだが、アンタ雰囲気でも酔っ払うくらいの下戸なんだってな？」
ギラリ、と男前の少し強面な瞳が狼の色で光る。
「……っ！俺、そろそろお暇いたします……っ」
「まあ待てよ」
パシ、とエクボに手首を掴まれて息を呑む。
「もう少し俺様の相手をしていけよ」
新隆が無力にもせめてと睨み付けるエクボの顔は、悪霊のように半

月形の目口が嘲笑っていた。

※※※Ｋパート※※※

頭の中で、けたたましく警報が鳴る。
掴まれた手首が熱い。エクボの大きな手がギリと食い込んで、新隆の浴衣の濃紺の袖がするりと前腕を滑り落ちる。
廊下と部屋を隔てる障子の向こう側から、微かに聞こえる虫の声。それ以外はうるさいほどの静寂に包まれて、二人の視線が緊張の中でかち合う。
「美人は睨め付けが一番美しい」
低く吐息を交えて、掴んだ手に口付けをひとつ落とされる。一気に危機感は憶測から本物に変わり、背中にぞわりと悪寒が走った。咄嗟に声を上げて抵抗を試みる。
「ッ！放してっ、ください！」
新隆も男だ。ぐいと掴まれた手を引く。だが、エクボの力はそんな新隆の腕力など嘲笑うかのように、ピクリとも動かない。微動だにしないのだ。一気に血の気が引いていき、体温が奪われていくような感覚すらある。
「・・・綺麗だな、アンタ」
「ーっ！」
がしと掴まれた手に口付けを落とされ、そのまま掌をチロリと舌先で触れられる。滑る感触にピクリと震える手がエクボの欲を掻き立てるスパイスになり、さらに悪戯を加速させていく。
掴んだ手首をくるりとなぞり、生命線を逆行するかのように時間をかけてゆっくり上へと舌先で舐る。わなわなと震えるその手のひらの反応を楽しむかのように、小指球、母指球となぞり、そして、指の股に舌を這わせた。その感触に手が一際強く震える。
そこは。
「や、めて」
それは恐怖か絶望か、ないまぜの感情に彩られた眼を見開いて、小さく抵抗の声を上げる、白い手の主人。そこは、左手の薬指。キラリと光る、銀の指輪。

誠司への操の証明である、誓いの指輪。
その指輪ごと薬指と中指の股の間へズルと舌を割り入れて、ベロリと見せるつけるように舐る。エクボの舌には冷たく存在感を放つ指輪の、かたく誓い合った夫婦の確固たる愛の証と新隆の生命の温もりが、銀の味となって鈍く広がる。ここまできてエクボへの抵抗を見せつけられているようで、苛つきが募る。
今更忌々しい。
そんな感情が芽生えて、薬指を丸ごと口腔内に収めてしまう。そして、歯で薬指の根本を甘噛みし、そのまま指輪をずるりと抜き取り、吐き出した。
「！」
トタ、とあっけなく畳に吐き捨てられて転がる、煌めく小さな銀環。それはもうエクボの唾液に犯されてしとどに濡れそぼり、小さな雫を纏わせ、畳をわずかに湿らせる。
「指輪が！」
はっとして新隆が指輪を拾おうとするが、手首を掴まれたままの体勢と酒を舐めたことが要因となって身体に力が入らず、正座していた脚を崩すしかできずにバランスを保てなくなり、倒れてしまう。図らずも倒れた先は、清潔な香りの漂う、空気と綿をふっくらと湛えた上質な夏掛けの上。ばふ、と少し派手な音を立て、新隆の蜜色の髪の毛が衝撃で揺れる。
「今は俺様との時間だろ」
「エクボさん、放して！」
掴まれたままの手首のせいで、まともに手をついて起き上がることもままならず、柔らかな寝具の上で身を捩るしか出来ない。
指輪の抜け落ちた薬指に舌を這わせながら、じわりと距離を詰めて見下ろしてくる三白眼。部屋の灯りが逆光となって、影になるエクボの顔に、ほんの少しだけ最愛の夫の面影がちらつく。だが、その表情には愛したあの温かな眼差しはなく、情欲に塗れて牙を剥く獣の獰猛な衝動が、息を殺して目をギラつかせていた。
手首は解放されることなく布団に縫い止められる。倒れた衝撃で乱れた浴衣の裾を直したくて、必死に脚元の合わせをぎゅうと掴む。この際皺になっても仕方ない。動かない脚を必死に寄せて、それ以

上肌蹴るのを懸命に防ぐ。
「そんなに頑張んなよ」
クスクスと笑いながら獣が言う。
「アンタ、こないだあんあん言いながら一人で張型相手に鳴いて善がってたじゃねぇか」
「？！」
思わず声にならない声が喉から飛び出て、エクボを凝視する。その表情は酒でほんのりと赤く染まる中に、明らかな驚愕と絶望を滲ませている。
「俺様はなァ？なにもアンタに無体を強いようなんて思っちゃいねェんだぜ」
「なにを言って」
「寂しくて疼いて仕方ないんだろ？慰めてやるって言ってんのさ」
「戯れも大概になさってください！」
慰める、その言葉に頭に血が登って、思わず拳を握った右手を振りかざす。だが酒に自由を奪われた拳などエクボの敵ではなく、あっさりと掴み取られてしまう。
両手首を囚われ、いよいよ抵抗の手段をなくした新隆に、悪魔のような笑みを浮かべたエクボの顔がずいと寄る。今にも呼吸がぶつかりそうなほどの距離に、緊張に震え血の気をなくした唇が小刻みに息を吐く。
「戯れだろこんなもの。大人の夜の嗜みだ」
「嫌です！お願い！指輪を返して！」
「駄目だ。返してほしければ・・・そうだなぁ」
エクボがニヤリと口角を上げ、新隆の琥珀色の瞳をじとり、と睨め付ける。
「夜伽をしろ」
愕然とする新隆。この道楽息子は何を言い出すのか。あまりの発言に頭を殴られたような衝撃が走る。
「ッ嫌です！」
当然と言わんばかりに拒絶をする。こんなこと今時あってはならない交渉事だ。自身が相談所を運営していた時だってこんな低俗な話はなかったと記憶している。だが。

「ちょうど今日辺りじゃないのか？仏壇前でまた、一人遊びするんだろ？」
「ー！・・・いい加減に」
「後ろ洗ってんだろ。知ってるんだからなこっちはよ」
それに、とエクボがキンと冷たく鋭いナイフのような目で新隆を射抜く。
「俺様は、次期当主だぞ。お前に断る権利はない」
それだけ言い放つと、エクボが黒地に緑の模様が散った上質な兵児帯を取り出して、新隆の両手首を造作もなくギチりと縛り上げげた。そして浴衣の胸元の合わせを強引にがばと開く。
「やめてください！エクボさん！」
縛られた手首をギチギチと暴れさせ、恐怖に塗れた眼をエクボに向ける。その様子がエクボにはたまらなくそそり、情欲がずくりと腰を刺激する。
開かれた白い胸元は、酒と風呂上がりでほんのりと薄桃色に染まり、薄い胸板をしっとりと彩る。あまり肉のついていない胸板に鎮座する乳首が浴衣の襟からほんの少し垣間見え、乳輪の薄褐色から桃色に混色していく肉の色が怪しく映える。さすがは誠司の見立てといったところか、その白い柔肌の上気した様子と濃紺の浴衣のコントラストが、激しく欲を掻き立てるのだった。
縛り上げられた両手首のせいで抑えをなくした脚元はだらしなく大きく乱れて左右に開き、新隆の日焼けしていない真っ白な太腿と脚の付け根を曝け出している。かろうじて男性の象徴部分は隠れているものの、少しでも動けば肌蹴るのは時間の問題であろうことは明白だった。
浴衣を唯一締めるのは、青鈍色の兵児帯。裾に刺繍された誠司の心尽くしの蒲公英が映えるように選ばれた色であることも理解できて、エクボはギリと奥歯を噛む。
「そんなに兄貴がいいかよ・・・」
ボソリと低く唸るエクボの言葉と同時に、彼の唇が鎖骨に齧り付く。
「いやだ！やめてください！」
自由の効かない身体に自分よりも体躯の良い男にのしかかられて、

抵抗の施しようがなく、ぶつけられる感触に鳴き叫ぶしかできない状況に、惨めさを極める。自分も男性ならと考えるが、体質的に酒を入れてしまっては勝てる勝負も負け戦になる事を自分で掌握しているのに、なぜこのような事態を招いてしまったのかと悔いても悔いきれない。今はただ、この獣が行為をやめてくれることを切に祈るしかないのだけれど。
そんなものは、あってないようなものだ。せめて夢であって欲しいと、最愛の人を亡くした瞬間から、全て夢想の世界の戯言であったとあの人と、微笑みを交わしたくて心が痛む。
嵐のようなエクボの無体に身体を必死に捩りながら、膝を擦り合わせて抵抗を続ける。だが現実はそんなに甘くはないのだ。
「いやぁっ！後生ですから！！」
気だるく力の抜けた両脚を割り開かれて、新隆の操が暴かれる。そこには下着を未装着のぐったりとしたペニスと、布団と体重に柔らかく押しつぶされる白い尻たぶ、そして付け根から伸び両に開かれた、白くしっとりと汗をかいた内股がエクボの眼前に曝け出された。
「ほぉ・・・これは」
「やだ！見ないでぇっ！」
新隆の哀願の声も心なしか色を纏い、眼前に繰り広げられるこの淫らな情景に興奮の香辛料を注いでいく。思わずエクボはごくりと生唾を飲み込む。その音が新隆の地獄耳に鳴り響き、この男が本気であることを否が応でも思い知らされる。
下腹にはふわりと生い茂る、少し色の濃い蜜色の陰毛。そしてそこからぐったりと生える、薄褐色の陰茎。先端は悲しげに地面を見下ろして、ほんのりと桃色に色づいた先を自身の皮膚にひた隠す。おそらくは恐怖で興奮などできず、性的快感を得るどころではないのだろう、とエクボはその様子をまじまじと観察した。
先ほど本人に指摘して、否定されなかったアナルの洗浄。ということは、後ろの準備は万全ということだ。
ならば。
今日は、初回だ。
「・・・・・・ぶち犯してやる」

ニヤリと笑い、膝裏をぐいと一気に持ち上げる。そして、柔らかな尻たぶをぐわし、と手で掴む。
「あッ！」
敏感なアナルの近くの肉を大きな手で揉むように掴まれ、思わず高い声が喉から飛び出てしまう。ビクリと身体が震え、これまで誠司に与えられてきた甘い刺激を覚えた蜜壺の入り口が、これから挿入されるであろう肉塊に期待をして歓喜に打ち震える反応だった。
「いや！触らないで！やめて！」

※※※EntsCatパート※※※

「なあ、誠司の嫁さんよ」
敢えて残酷に、エクボはひたりと魔羅の先走りを入り口に塗りつけながら腰を揺らす。
「あ……あ……」
「分かるか？これからもう一つの指輪が割れるんだ。アンタのアニキへの貞操だ」
ぬりゅ、と擦り付けられる怒張を、男を知っている身体が飲み込もうとちゅうと吸い付く。
「やめてください……」
もはや泣き落とししかない。だが新隆のその悩ましい泣き顔は、エクボの情欲を煽っただけだった。
「だぁめだ。俺はアニキの物はなんでも奪ってきた男だからな。土地、車、家督、そして命……弟ってのはそういうもんだろ？」
くぷ、と新隆の肉輪を割ろうと先端に力が入れられる。
「……まさか」
驚愕に新隆の目が見開かれる。
「貴方、誠司さんを──！！」
怒りに眉を尖らせる新隆は、美しくて。
エクボは満足そうにその気の強い顔を眺める。そうそう、この顔をさせたかった、と。
実際さすがに誠司の死は事故である。そこまではエクボとてできない。

だが。
事実かどうかはどうでも良かった。
夫の仇に犯される。その姿が壮絶なほど、美しかったから。
「ほおら、はいっちまったぞ？」
ぐぷん、と。
エクボの怒張の、張り出した先端が新隆の肉輪を割り入った。
もう一つの貞操の輪が、破られてしまった。
「いやぁあああっ！！」
自由にならない手を捩りながら、どうにか押し出そうと新隆は腹に力を入れる。
だが性的には甘やかされていた新隆は知らないが、力を入れれば入れるほど人間の身体というものは異物を受け入れやすく動いてしまう。
「きゅうきゅう吸い付いて、俺を飲み込むように蠢いて、身体は正直だなぁ、新隆さん？」
──思っていたよりも、悦い。
（アニキが夢中になるのも分かるな）
熱い男の体内が、力強くエクボの魔羅を包み込んでくる。気を抜くと挿れているだけで出してしまいそうだ。
「お願いです……もうここまで辱めれば、お気も済まれたでしょう……抜いてください……もう、嫌……」
それでも折れない誠司への愛に、エクボは心底イラついた。
「何いってやがる、これからだろうがよ」
「っ、ぁん！」
ゆさ、と腰を揺さぶると、ぐちゅんと音を立てて新隆のオンナが根本までエクボを呑み込んだ。
２色の下生えが混ざり合う。
「ほぉら、見ろ。ぐっぽりと呑み込んで、美味そうにしゃぶってるぜぇ？……夫以外のチンポをな」
ぐいと足を持ち上げて結合部を見せつけてやると、さぁぁあと新隆の顔が唇まで青くなる。
「お、お願い……抜いて、今なら、誰にも言いませんから……」
「俺は言いふらして貰って一向に構わねぇからなぁ、そのお願いは

聞けねぇなぁ……あー、気持ちイイ……具合のいいマンコだぜぇ」
言葉での辱めにかっと新隆の顔が赤くなる。
白い頬が桃に染まると、なんとも言えない愛らしさだった。
「なぁ、新隆。俺はこれからお前をぐちゃぐちゃに犯して、腹ん中に俺の精液を匂いが抜けねぇくらい注いで、擦り込んでやろうと思ってる」
ゆるゆると腰を動かしながらエクボは残酷な宣言をする。
「でも、そうだなぁ。今からお前がイくまでに、先に俺をイかせられたら、中に出すのは止めてやるよ。体にぶっかけてやる。……どうする？頑張ってみるか？」
たん、たん、と腰を打ち付けながらエクボが戯れる。その度に小さく声を上げさせられていた新隆が、見せかけの希望に縋りたくなるのは仕方無かった。
「ほ、本当ですねっ？っぁ、ナカに出すのは、止めて、っんぅ、くださるのですね？」
「ああ」
新隆は必死に自分を蹂躙するペニスに集中して、イかせようと締め付ける。
「……っ、あ、あう、……っあん、あ、あ！」
だがそれは逆効果だった。締め付けるほどに浮き出した血管までエクボの魔羅を意識してしまう。狭くなった肉壁を張り出したカリで引き裂かれる度に、甘い痺れが何度も新隆に襲いかかる。
「おー、良く締まる締まる。イきそうだ」
戯れに絶頂をほのめかすエクボに新隆は唇を噛む。
「ん、ぅっ！」
力を振り絞って、入り口をぎゅうと締めた。
「お……っと。今のは中々効いたぜ？」
びくりとエクボのペニスが刺激に反応して跳ねる。
「あ……う……」
だが、新隆にとっても諸刃の刃だった。性感帯でエクボを締め付けた新隆の全身にじんわりと甘い痺れが広がる。
もう新隆の性器は鎌首をもたげて、たらたらと雫をこぼしていた。
羞恥ではなく快楽に上気し始めた新隆の顔にニヤリとエクボは笑

う。
「おっ、おっ、ここは、なかなか具合が、いいなあ？」
「──！」
浅い所でぐぽぐぽと魔羅をこねるように動かし始めたエクボに新隆は焦る。
（そ、そこは──！）
夫に開発されてふっくらと膨らんだ前立腺が、ぐっぐっと何度もエクボのカリで潰される。
「ぁあんっ！あ、あ！ああああっ！」
強すぎる快感に新隆は髪を振り乱す。
「このコリコリしたのがいいんだよなあ」
悪霊のような顔をしてエクボが卑猥に腰をゆする。
「あああああっ！あ、ん、んんんんっ、ダメえ……っ！」
足先を丸めてピンとのばして、新隆ははしたなく吐精した。
「あ……」
ぴりぴりとした絶頂の余韻に流されながら、自分で汚してしまった誠司からの贈り物の浴衣を呆然と眺める。皮肉なことに、濃紺の浴衣に白が映えていた。
「あーあ、イっちまったなぁ？」
恐ろしい声にハッとする。
「ダンナ以外のチンポでイっちまった奥さんには、きつ〜いお仕置きが必要だよな？」
「や、やめ……っあ！」
ずごん、と音がしそうなほど突然最奥まで突かれて、新隆は喉を逸らした。
「先ずはナカダシ一発目だ」
「……！いや、嫌、やめてくださ……あ……！」
ずんずんと犯してきたチンポが、びゅるると奥に出したのを、じんわりと腹の中に広がる熱さで感じる。
「あ……」
顔面に絶望を浮かべる新隆に、エクボは満足の笑みを浮かべる。
「これでお前さんは俺のオンナだ」
だが、その言い草にはキッと睨みを返した。

「腐ってもわたくしは九下部誠司の妻、貴方の情夫などにはなりません。貴方の物、などと、弁えなさい、貴方は夫の弟に過ぎないのですから！」
さっきまで余裕綽々だったエクボが、打って変わって怒りに唇をわなわなと震わせる。
「どいつもこいつも、アニキ、アニキ、アニキ……そんなにアニキがお好きですか、ってなもんだよ、気持ち悪ぃ！」
「え、えっ」
戸惑う新隆の顔にエクボは顔をぐあっと近付ける。
「お前も俺を『出来損ない』と呼ぶのか」
「は？」
何を言っているのか分からない。思わず新隆の素が出る。
「な、何を言って……っあ！」
早くも復活したエクボが挿送を再開する。
「いいぜ、なら身体で判断しろよ、『出来損ない』かどうかをよ！」
「いやあっ！もう、一回されたじゃありませんか！もう、許して……」
中出しされて汚されたアナルが、ぐちゅっ、ぐぽっと耳を塞ぎたくなるような卑猥な音を出す。
「まだまだ足んねーよ。ほら、締めろ！」
「あぁ……っ！」
ぐり、と乳首をつねられて甘い声が新隆の口から漏れる。
「へぇ？」
「あ、ああ……やめて、触らな……っあん！」
親指の爪端ではじくように虐められて、新隆の腰が跳ねる。
「モロ感じゃねーか」
新しいおもちゃを見つけたエクボは腰を小刻みに揺すりながら、べろんともう片方の乳首を舐め上げた。
「あぁあぁんっ♡」
耐え切れず甘ったるい声を上げてしまった新隆の肉壺が、きゅんきゅんとエクボの魔羅を蠢きながらさすり、締め付ける。
（こいつはいい）

エクボは新隆の乳首を片方は硬くした舌でほじり乳輪を舐めまわし、もう片方は爪でバツを付けるのと摘み上げを繰り返しながら、パンパンと腹側を抉るように腰を打ち付けた。
「やらぁああぁっ♡あんっあんっ〰〰〰っ♡♡♡」
ゴリゴリと弱いところをいくつも擦られて新隆があられも無い声を上げさせられてメスイキする。
「あ……あぁ……」
目の前がチカチカするような絶頂に、新隆の内部はうねるようにぎゅううとエクボを締め上げる。
「……っく」
たまらずまたエクボは新隆の中に吐き出す。
じんと腰にくるような甘い痺れを味わっていると、新隆のアナルのふちから、こぽっとエクボの精液が溢れて垂れていった。
「も……堪忍して……」
感じてしまった恥ずかしさから、顔をエクボから背けて、新隆がか細い声で懇願する。
その声にすら隠しきれない色が滲んでいて、たまらずズグン、とまたエクボのチンポに血が流れた。
「ひ……っ」
「あんたがあんまり可愛くおねだりするから、また勃っちまったじゃねぇか。どうしてくれるんだ？」
くち、ひちゅ、とエクボが動かしていないのに、メスイキの余韻でくぱくぱとオスを喰む入り口が、淫靡な音を立てる。
「おいおいはしたねぇぞ、くちゃくちゃ音を立ててチンポを食べるなよ」
「……っ！」
かあああっと赤面した新隆は、それでも事実に言い返せずひたすらに恥辱に耐える。
「やめて欲しいか？」
ゆる、とエクボが腰を揺すると、ぶぢゅっと音がして中出しされた精液が入り口から吹き出る。
こくこくと必死に顔を逸らしたまま新隆は頷いた。
「上手にお前がお口を使えたら、次で終わりにしてやるよ」

「……？口淫しろということですか？」
きょとんと思わず新隆は涙で潤んだ瞳でエクボを見返す。
ドクン、とエクボの心臓が、性欲とは別の方向に跳ねた。
蜂蜜を煮詰めてかき混ぜたようなきらめく瞳は、あまりにも甘く、美しかった。
エクボは頭を振って新隆の下腹部に手を当てる。
「今何がどうなってるのか、その良く回るお口でナマ実況をじょーずにできたら、終わりにしてやるよ。でなきゃ朝までしっぽりコースだ」
ごくりと新隆の喉が緊張に鳴る。
「わ、分かりました。……っあん！奥、奥はやめてぇ……っ」
腰をグラインドさせたエクボが、チッチッチ、と愉快そうに舌を鳴らす。
「そうじゃねぇだろぉ？」
こくん、と喉を湿らせるために、新隆がツバを呑み込む。
「エ、エクボさんのペニスが、ぁっ、ごんごん、って、んぅっ、奥に当たって、ますっ」
「ふんふん、それで？どうなんだよ、気持ちいいのか、痛いのか？」
「……痛い、です……っア！♡」
ぐい、と奥を押されて、思わず新隆の喉から悦楽の声が出た。
「今のが痛い声かよ？オイオイちゃんと実況できねぇのか？それならさっきの約束はナシだぜ？」
「ごめんなさいっ、気持ちいい、ですっ、じんじんして、気持ちいいっ♡」
グリグリとエクボが先端で結腸の入り口を捏ねてやれば、気持ちいいと新隆は声を上げた。
「さてと、ちょっとは嫁御を歓ばせてやるか」
エクボは新隆の足を持ち上げ直し、自らの太ももの上に尻たぶから裏ももが来るようにする。
そして挿送しやすくしてから、ゆっくりと入り口近くまでチンポを抜く。
「あっ♡あっ♡あっ♡ずろろろって♡エクボさんのが、引き抜かれ

てっ♡」
「チンポだ。チンポかデカマラって言え」
「ち、チンポが、抜けて行って、っんぅ、ぶりゅぶりゅって中出しせーえきが掻き出されてっ、ぞくぞくぞくってぇ♡甘イキしたぁっ♡♡♡」
「……っ」
いつもはお上品な口が、みだらな単語を連発するのにエクボは堪らなくなる。
自然と打ち付ける腰が速くなる
「あっ！あんっ♡ピストン、速いっ♡♡チンポがっ♡ぐにっ♡ぐにって♡メスイキスイッチ押してるぅっ♡♡♡」
「へぇ……」
エクボは意識して前立腺の膨らみを狙いながらピストンした。
「んぉ゛っ♡らめらめらめっ♡俺のイイところっ♡ツツかれてバカになっちゃうっ♡♡んぁ゛あ゛あ゛っ♡♡イくっ、メスイキじまずゔゔゔゔっ♡♡♡♡」
泣きそうになりながら実況する新隆が、足をガクガク震わせながら腰から全身に這っていく甘い痺れに翻弄される。
「ほー、上手に出さずにイけるもんだな。しっかり褥で嫁さんやってるんだな、エライエライ」
そう言って新隆の頭を撫でながらも、エクボは前立腺をこするようなピストンを辞めない。
「いっ♡今イったからぁっ♡あああっ♡ズボズボやめてくださぁいっ♡♡チンポやめてぇっ♡」
「俺様はまだイってねーんだよ。オイ、実況続けろよ」
うる、と過ぎた快感に新隆の目にねばついた涙の膜が満ちていく。
「そんなぁっ♡ひどいっ♡ああああっ♡イったばかりのっ♡っんう、粘膜をこすられてっ♡♡♡」
はぁ、と新隆が熱い息を吐く。
「たまらないっ♡♡♡」
言ってから、ハッと新隆が青くなる。
「い、今のは、ちが……っ」
「素直に成れよ、兄嫁殿よぉ」

ずりゅりゅ、と奥に侵入されて新隆が高い声を上げる。
「義弟チンポで感じてる、中出しされてたまらない、ってな！」
「ち、ちがう……俺は、そんな……」
ふるふると力無く新隆は首を振る。
「実況が止まってんぞ」
ハッとして新隆が実況を再開する。
「チンポが出入りして、裏筋を擦り付けてきてる。っん、微かに震えてて、限界が近そう……っあ！」
ごっ、と骨盤同士がぶつかって音がするほど深く穿たれて、新隆は甘くて高い声を上げた。
「……俺ん中でチンポがドクドク鼓動してて、あついものがじんわりと腹の中に広がっていってる……」
「つまり？」
「……っ、中出しされました……」
恥ずかしそうにそう言う新隆に、満足気にエクボは息をついた。
「さてと」
「ン……っ」
エクボが最奥からずぽっと一気にチンポを引き抜いたせいで、入り口からごぷりと精液が溢れる。
その排泄を思わせる音に、新隆は耳を塞ぎたくなった。
「約束どおり、終わりにしてやらないとなぁ？」
しゅる、とエクボが新隆の手を拘束していた兵児帯をゆるめる。
ホッとした新隆の開いた唇の間に。
エクボはとっくりから酒を流し込んだ。
「──！！」
慌てて吐き出そうとする新隆の鼻と口を押さえ、ごくんと一口呑み込むのを確認してから、手を離す。乱暴に投げられたとっくりが倒れて畳にシミを作っていた。
「何……す……」
酒に弱い新隆がむせながら、目がすぐにトロンと正気を失い、身体がほんのり赤くなっていく。
「あ……ぇあ……？」
前後不覚になった頃に、エクボは手の拘束を外して、そっと「兄」

の声音で新隆に囁きかけた。
「『どうしたんだい、新隆』」
「あれ……誠司……？」
「『今日は気分じゃないのかい？やめておこうか？』」
「誠司……っ！」
ガバッと新隆がエクボに抱きつく。
「頼むっ、今日は激しく抱いてくれっ！嫌な夢を見たんだ……忘れさせて欲しい……」
「『いいよ、可愛い新隆。優しく抱き潰してあげよう』」
新隆が目を閉じてエクボにキスをねだってくる。
が。
エクボはそれを人差し指で押して止めた。
そこは最後の「操」だから。
２人が結婚式で誓った、重要な誓いだから。
誠司を装ったままで奪っては、新隆を壊しきれないと思ったからだ。
「『虫歯と口内炎が出来てしまってね、今日はキスは無しで許しておくれ』」
「ビタミン足りてねぇんじゃねぇの？もー、仕方ないな……じゃあ俺、コッチにキスしちゃお」
にっとイタズラに笑う新隆に心臓を跳ねさせていたら、チンポを根本からぎゅっと掴まれてエクボは一瞬飛び上がった。へし折られるかと思った。
「ちゅ、ちゅ、ちゅ～♡誠司のカワイイちんちんに、ごあいさつ♡」
ぷちゅ、ぷちゅと柔らかい唇で鈴口にキスされてチンポが跳ねる。

愛情１００％の新隆は、めちゃくちゃエロ可愛かった。

「ん……ざーめんの味がいつもと違うな……変なもの食べたの？」
「『いや……』」
「ま、いっか。あは♡もうガチガチじゃん、助平♡」
さすが人妻、慣れた手つきでカリ首をきゅっきゅとしごきながら口

に含んだ亀頭を舌で鈴口責めしてくる。
「ね、誠司……」
ころん、と転がって、新隆は自ら足を持ち上げて「食べて♡」のポーズを取る。
「俺の好きな人は、おちんちんで応えてくださぁいっ♡」
エクボは血管が切れるかと思った。二重の意味で。新隆のエロさと、兄への嫉妬で。
「ぁんっ♡俺の大好きな人きたぁっ♡」
ぐちゅんとチンポの先端を潜らせると、新隆が腕と足で絡みついてくる。
「好きっ♡好きぃっ♡もっと俺をぐちゃぐちゃにして、誠司ぃっ♡」
興奮するチンポとは裏腹に、エクボの目が殺気立っていく。
みろ。ナカの様子がさっきとは全然違う。少し動かすだけで柔らかく包み込んできて、エクボのを逃すまいと熱く絡んでくる。
「あんっ♡いいっ♡イくっ、誠司、誠司──！」
「……っく」
新隆の髪の毛が軽く立つほど、全身に鳥肌を立たせてメスイキする体内に、引っ張られてエクボも出してしまう。
イった時の締まり方が先程の比では無かった。
愛情の有無でここまで変わるものか、とエクボは舌打ちしたくなる。
「あ……♡あ……♡まだイってる……♡誠司のも、ぴくぴくしてる……♡」
エクボのチンポが入った下腹を、新隆は愛おしそうに撫でさする。
「もっとズボズボして？俺を愛して、『誠司』──」
チッ、とエクボは舌打ちをして性器を抜いた。
「『ごめんな、今日はコレで終わりな』」
怒って暴れ出したい気持ちを抑えながら、エクボはつとめて冷静な声を出す。
「ええ？いつもは俺がもうダメって言ってもするくせに……ま、いいけどさ」
しぶしぶ立ち上がって風呂に向かおうとする新隆の後ろから、ご

ぽ、ぶちゅ、と精液がこぼれて垂れる。
「……まずは掻き出してやるよ」
エクボはしぶしぶそう言った。
泥酔している新隆はされるがままだ。
その後風呂に連れて行ってやり、エクボは身体を洗ってやる。
「……」
気付いたら面白いな、と思いながら、エクボは内ももにキスマークを１つ残した。自慰をする時に気が付いて、赤面するのを思うと楽しい。
風呂から上がらせた新隆に、肩口は黒く、裾に向かうに連れて緑になる、彼岸花が裾に刺繍された浴衣を着せた。帯も刺繍に合わせて朱色である。わざわざ染めて貰ったので、少し高くついたのをエクボは覚えている。
「……俺様もなーんでこんなもの仕立てちまうかねぇ？」
まだ兄が生きていた時。この生地を見て一目惚れしたのだ。
きっと新隆に似合う。そう思ってこんなものを仕立ててしまった。
思った通り、控えめに金の混じった黒い生地は、新隆のひだまりのような髪によく似合った。
「……今日はそれを着て寝やがれ」
エクボは新隆を兄の部屋の布団に寝かせ、自分は自室の片付けに戻ったのだった。
何せ淫液でめちゃくちゃになっていたので。
それをお手伝いさんに掃除させるわけにはいかなかった。

※※※Ｋパート※※※

「・・・・・・」
改めて眺める。
つい先程まで戯れの場であったそこは、女中が快適さを追求してピンと張ったシーツを台無しにするが如く、皺と隆起と剥がれ、そして覚えのありすぎる体液たちで、単純明快に言えばぐっちゃぐちゃな事後の痕跡がまざまざと残り、情欲が濃く香って乱れていた。
実際には目に見えないのに、新隆が寝そべっていた部分に霧のよう

に色香の残滓が存在するようで、匂いもないのに香しい艶めきが呼吸を圧迫して窒息してしまいそうだ。
彼の臀部があった部分には、自分が散々吐き出した欲望と新隆の肉体から滴り落ちた汗が混じり、その他の部分には新隆が弾みで吐き出したと思われる精液とカウパーが、ぱたぱたと染みを作り出してじんわりと色を変えていた。まだ吸われ切らずにそこにとろりと残滓を残す精液を掬い取って舐めてみる。
あぁ、香りがよく、甘い。
そして同時に沸き起こる、どうしようもない兄への嫉妬。
『ぁんっ♡俺の大好きな人きたぁっ♡』
「・・・大好き、ねぇ」
苛立ちにため息をつきながら、自分が放り投げた猪口を拾い上げる。そして、新隆の薄い唇が触れた部分を思い返し、彼の朱に染まった頬と紅の唇を回想する。
投げた徳利にはまだほんの少し酒が残っていて、その微々たる酒を猪口に移し、新隆が口付けた部分に自分の唇を触れる。
甘い。
彼が触れたところ、いたところ、全ての痕跡が味覚すら変化させてしまうことに、悔しくなる。
絶対に、ものにしてやる。
自分が抜き取って吐き出した忌々しい結婚指輪を拾い上げ、まじまじとその造作を見る。シンプルな中にも高級品であることは一目瞭然で、表面には月桂樹の葉の模様が繊細に彫り込まれている。そしてリングの面には服にかからないように埋め込まれた極小カラットの宝石が二つ。華やかな濃い色味のイエロートルマリンと鳩の血の色のような燻んだ赤色のルビー。それらが光を受けて星のようにキラキラと煌めいて、エクボの眼を柔らかく突き刺す。
月桂樹の葉の花言葉は、「死ぬまで変わらず」。
だが。
エクボは月桂樹の花を送ってやりたい、と考える。
花言葉は「裏切り」だ。
「・・・うまいことできてんなぁ」
身代として奪ったその指輪を光に翳して眺めていたが、せっかくの

「身代」である。隠さなければこの先、面白くないだろう。これはよくよく熟考しなければ。
「ククク・・・」
思わず笑みが浮かぶ。
今日は満月。縁側からのぞく眩しいほどの白銀の月明かりが真夏の夜の虫の声と相まって、艶めいた未亡人との死んでも忘れられない戯れの開幕を、静かに宣言した。

「・・・ん・・・」
ふと明るみを感じて、じっとりと重い瞼をゆっくりと上げる。
早朝4時半頃か。夏は日の出も早く、うっすらと白み始めた空の光が、装飾を施された欄間や障子越しに見えて、朝なのだとぼんやりと認識する。
「まだ、早いな・・・」
深く鼻腔で呼吸をして寝返りを打つ。頭部を支える枕がクシャリと微かな音を立てて凹み、肌にかかる夏掛けがシュルシュルと上品な衣擦れの音を立てて、心地よい二度寝の世界へと誘おうとする。
「・・・・ふ・・・」
昨晩は、なんだかものすごく嫌な夢を見た気がした。酒を流し込まれ、快楽を強いられる夢。自分は嫌だと言ったのに、あれは、やめてくれなくて。
気持ち、よくて。
「・・・・・・」
二度寝しようと瞼を閉じたのに、思い出される夢は淫らで、とてもじゃないが口に出して言えないようなことばかりが駆け巡り、どんどんと脳を覚醒に導いていく。
なんて夢を見てしまったんだろう、天井を見上げて左手の甲で両目を覆い隠す。こんな時は最愛の人に叱咤してほしい。
左手を目から離して天井にかざし、結婚指輪を見つめる。だが。
「・・・・・・え」
あるはずの指輪が、ない。
そして、重力に従ってするりと腕を滑り落ちる浴衣の袖が見えて、愕然とする。

「なん・・・だ、この・・・浴衣・・・・・・」
こっくりとした漆黒の闇に浮かぶ、黄金のか細い煌めき。自分は確か、濃紺の蒲公英の刺繍の入った浴衣を着用していたはずだ。
そして一気に思い出す。昨晩の快楽に塗れた、衝撃的なほどの極彩色に染まる地獄絵図。
「！」
ガバと起きて身体を確認する。
無いのは指輪と浴衣。代わりにあるのは、いつの間に着替えたこの、覚えのない黒地の浴衣。肩口が黒く、裾に向かうにつれて鮮やかな緑色に見事に変色していく染めが目に映える。早朝の仄暗い光の中でも黒地に埋もれる金糸が控えめにきらりと煌めいて、スリと動く裾には、毒々しくも美しい朱の彼岸花の刺繍。腰を留める帯はその刺繍に合わせるかのように、また極彩の朱で染め上げられていた。
「・・・嫌だ・・・」
こんな情夫のような浴衣を誠司が贈るはずがなかった。そして、一気に思い出される昨晩の記憶。ズキリと痛む頭を瞬時に駆け巡る、営みの数々。
その相手は、エクボ。
「いやだっ・・・・・・」
頭を抱えてぶんぶんと振り、記憶を消し去ろうとする。だが、悲しいことにそれらは全て、現実であって。
「いやぁ・・・ッ・・・！」
思い出されるのは彼の悪魔のように歪んだ顔。
『なぁ、新隆』
いやだ、その声で俺の名前を呼ぶな。
『俺はこれからお前をぐちゃぐちゃに犯して』
やめてくれ。冗談も大概にしろ。
『腹ん中に俺の精液を匂いが抜けねぇくらい注いで、擦り込んでやろうと思ってる』
「いやだぁッ・・・！！」
思わず両手で顔面を覆って、絶望から溢れ出る涙で掌が熱く濡れる。

目眩く脳内に繰り広げられる昨夜の情景の数々。指輪を抜き取られ、体内に彼の猛る怒張を受け入れて、あろうことか甘くゆらゆらと腰を振って、何度も中に欲を放たれていた。久しぶりに奥に感じた熱い淀みで身体の奥底が歓喜に満ち溢れて、もっと欲しいと感じてしまったのではなかったか。
『たまらないっ♡♡♡』
唐突に思い出される自分が発した言葉。
認めたくなくて頭をブンと振って夏掛けをよけて起床する。そして姿見の前に焦燥感に塗れながら立ち、帯を解き浴衣を脱ぐ。夢であってほしい。もしくは、ほんの一部でもいいから間違いであって欲しいと願いながら。
シュルシュルと慣れた手つきで脱衣する。この和装の着付けも、誠司から仕込まれてようやく身につけた大事な技術。情事後も自分で着付けができるようにと、それまでカジュアルしか着用したことがなかった新隆に甘く優しい褥の中で、処女喪失と引き換えに教え込まれた甘美な、大切な記憶だった。
肩から抜かれて、はらりと儚く畳に落ちる浴衣と帯。日の出を迎えて白んだ部屋の中で、真っ白な裸体を曝け出し、姿見に全貌を映し出す。見たところ異常はなく、傷なども特にはないように見える。だが。
「？」
鎖骨、薄い胸板、薄桃色の両乳首、柔らかな薄い腹筋、鼠蹊部。どんどんと視線を下に向け、頭髪よりも少し濃い色味の陰毛をたどり、しとやかな陰茎を確認して、内股へ。
そこに、覚えのないホクロがひとつ。
やけに紅い。そしてホクロにしては、大きかった。
「あ・・・ッ・・・」
それはエクボが散らした、所有の証であるキスマークだった。鈍く紅く色づいて、花びらのように咲いていた。
「いやだぁあ！！」
力が抜けて、その場に腰から砕けてへたりと座り込む。目の前の姿見には、柔らかな内股に紅をひとつ刻んだ白磁器のようにとろりとした肌の肉体が、妖艶に脚を投げ出して映し出されていた。

新隆は、操を破ってしまったのだった。

力の抜けた脚を叱咤して、仏壇へ這い寄る。そこには、温かく笑みを浮かべる最愛の男の小さな遺影。
「誠司・・・・・・！」
涙がほた、と目尻からこぼれ落ち、畳を濡らす。手を伸ばして、遺影を手に取って、裸の胸にギュッと抱きしめる。
その場に座り込んで俯く。丸まった、骨の少し浮き出た華奢な背中が嗚咽で痙攣する。
声にならない声が嗚咽に混じって、喉から呼吸と共に吐き出され、唇がわなわなと震えた。
止まらない大粒の涙がボタボタと遺影を濡らして、誠司の顔が歪んだ。
「ごめんなさい・・・・・・！！」

声を押し殺して泣く、早朝のこと。
太陽は無情にも上り、また新たな一日が始まる。
操を破り絆を失った絶望から、その白い裸体はさらに儚さを上塗りして、壮絶な色香を纏う白百合へと変貌を遂げた。